

猫公園で待ち合わせ

鈴木 真砂美 東京都墨田区 三十五歳

いつもの公園。いつものメンバー。木々を見ながら、会話に花を咲かせる時間。「猫公園で待ち合わせ。」それが私たちの日常だった。いつもの待ち合わせがなくなったのは、コロナが流行った頃。劇場で働く友人は、「公演を中止する団体がたくさんある中集まるなんてできない。」そう言った。演劇関係者である私たちは彼の意見をないがしろにはできなかった。

冬には、次の花見には、次の夏には。いつしか誰も猫公園に集まろうとは言わなくなり三年が経つ春、「猫公園で飲まない？」そう言い出したのは劇場で働く友人だった。徐々にまた感染者が増え今回も中止かと思った時、一人が提案した。「リモート花見しない？ それぞれ桜が見えるところへ行って、グループ通話繋いで花見するの。」

私たちはリモート花見を決行した。「桜が綺麗だね。」「こっちはもう葉桜だよ。」「見えるー？」十人近い仲間たちが思い思いに歩き話し、そし笑った。一人ずつの散歩は携帯を通じてみんなの散歩になった。「俺、猫公園着いた。」一人がカメラをオンにした。「うわー懐かしい。」会えない時間に、みんな大分変わった。仕事はリモートになり、子供はすでに二歳。それでも猫公園の桜は変わらず綺麗に力強く咲いていた。「いつか猫公園で待ち合わせね。」色んなことが変わっても、変わらない人や場所がある。いつか私たちがまた花を咲かせられる日、そんな日を楽しみに明日も頑張れる気がした。